

「ここは愛知の長久手（ながくて）と言う所。そこに杜若（かきつばた）柄の着物に車エビのシユシユを着けた娘が歩いてた。

とおりかかった女子高生がその娘に声をかける。

「ぼぶかるちゃん、おはよー」

ぼぶかると呼ばれた杜若の娘は笑顔で返す。

「おはよう」

娘の名前はぼぶかる。日本第三の都市、愛知県の文化の妖精である。

ぼぶかるは朝日で新緑が光る歩道を歩くと行きつけで有ろう喫茶店に入った。

ぼぶかるは珈琲とモーニングに小倉トーストを頼むと一息ついていたら隣の席の主婦が、

「ぼぶかるちゃん、おはようさん。まーた、エネミイちゃんの買い出しかい？ 大変だなも」

「大丈夫ですよ。鈴木さん、エネミイちゃんも図書館のお仕事で大変ですから」

暫くすると店員が手間のかかったクロックムツシュを包装してぼぶかるに渡す。

「毎日ありがとうございます」

丁寧にお礼を言うぼぶかる。

帰り道の事。中学生で有ろう車椅子姿の黒髪ストレートの少女が坂道の前で困っていた。

ぼぶかるは少女の後ろから声をかける。

「大丈夫ですか？ こつちからなら行けますよ」

ぼぶかるはより坂道が緩い所に車イスを押して案内した。そして少女は、

「あ、ここまで結構です。ありがとうございます。出来ればお名前を」

「私はぼぶかると言います。困ったことがあったらいつでも声をかけて下さいね」

少女は頭を下げてぼぶかるを見送った。

「おーそーい」

頬を膨らませ茶色い髪に肌は色白でコノハズクをモチーフにしたドレスを着た少女が本の山の中でぼぶかるを睨んでいた。

「ごめんなさいね、エネミイちゃん。困ってる人が居たからつい。はい、朝ご飯。これで許してね」

ぼぶかるが持つてきたクロックムツシュを渡すとエネミイと呼ばれた少女は、

「ふん、これくらいライバルとしてとうぜんなんだから。まあ、毎日こうして朝食、昼食、夜食におやつまで持つてきてくれるんだから許してあげるわ」

エネミイは何故かドヤ顔でそれを受け取り、苦い笑いで返すぼぶかる。

「それじゃ、エネミイちゃん。私はまた出てくるからまたお留守番おねがいね」

そう言ってぼぶかるはまた人間界に出て行った。

夕暮れ。再び長久手をぼぶかるが散歩していると再び車イスに乗った今度は中学生の少年が坂道の前で困っている様子だった。

ぼぶかるが朝と同じように声をかける。

「大丈夫ですか？ こっちからなら行けますよ」

ぼぶかるが車椅子を押そうとすると、

「いらん、余計な事をするな！」

少年はさっきの少女とは真逆な余計な世話だと言わんばかりに声を荒らげてぼぶかるを拒否した。

ぼぶかるはびっくりした顔をしたがすぐに笑顔を取り戻し少年に語りかけた。

「じゃあ、案内だけでもして良いかな？」

少年もさっきの怒号は言い過ぎた様子で気まずそうに首を縦に振った。

ぼぶかるは少年に優しい口調で問いかける。

「君、名前は？」

「カイジ。海と難しい方の路（みち）って書いて海路」

「海路君か。その制服は長久手中学だよ。部活は何をしてるの？」

すると海路は怪訝そうな顔をして、

「なんで、お姉さんにそこまで答えなきゃいけないの？」

だが、ぼぶかるは何かを悟った様にそしてさらに優しく。

「さっき海路君凄く怖い声で返して来たじゃない？ ちゃんとお話してくれないとお姉さん海路君に嫌われたままみたいで傷ついちゃうな」

海路はとてもバツが悪そうにだがこの優しい人を傷つけない様な気持ちもある様な申しはら口を紡いでまずは小さな声で、

「……カー部」

ぼぶかるは足を止めて海路の方に振り向き、

「何？」

すると海路は何かを吹っ切れた様に、

「サッカー部！」

ぼぶかるはその関係に何かを感じた様子で、

「その足でかな？ よかったら何かあったか聞かせてくれる？」

海路はその時は伏し目だったがぼぶかるは何かを知っている様な、もしかしたら自分の悩みを解決してくれるのではと言う確定では無い感覚を海路に伝えて来た。

「事故があったんだ。3ヶ月前に。自動車事故だ」

海路はじつと自分の足を見て、

「もう動かない。感覚がないんだ。もうサッカーも何も出来ないんだ」

目に涙を潤ませて黙り込む海路。そしてぼぶかるはそんな海路の手を包み、

「ねえ、一週間後また会える？」

「あ、ああ」

ぼぶかるは何かを理解した様な目で海路を見て海路はそれを照れた様に返した。

エネミイの図書館。エネミイは食事をとりながらぼぶかるに、

「で、またちよっかい出したの？」

「まあ、そんな所です」

ツンとした態度のエネミイにぼぶかるは申し訳なさそうにしてまたエネミイが、

「ぼぶかる、あなた文化の妖精としての自覚あるの？ それじゃあ、いつまで立っても本分を達成出来ないわよ」

黙り込むぼぶかる。そしてエネミイが哀れそうにおでこに手を当てて、

「で、何か考えてるんでしょうね」

「手伝ってくれるんですか！？」

ぼぶかるはさっきの顔が嘘の様に晴れた顔をした。

「仕方ないじゃない。あなたはこのエネミイ様のライバルなんだから」

そして一週間後になった。

肌寒い朝。息は白くモクモクと浮き上がる。

海路は少しいやたいそう無理したお洒落な服を来て車椅子で約束した長久手公園に向かうとぼぶかるが先に待っていた。ぼぶかるが笑顔で手を振る。

「来てくれたのね。でも約束より15分も早いじゃない」

海路は恥ずかしそうに伏し目で、

「サッカー部では15分前集合は基本ですから」

「そっか、それじゃあ。ちよっと早いけど行こうか」

今度は自然にぼぶかるは車椅子を押して目的地へ乗った。

向かったのは名古屋市瑞穂区にある名古屋市総合リハビリテーションセンター。

「1116」

海路は不思議そうな顔でその白く大きな建物を見上げた。

「まさか、ここに俺をなおしてくれる医者がいるとか？」

海路は少し悪びれた表情でぼぶかるの顔を見る。

「んー、さすがにそれは出来ないけど行けば分かるよ」

ぼぶかるは海路を敷地内に通し中の体育館の様な場所へ入った。

そこでは激しく金属がぶつかる音。大きな声を上げる男性の声、爽快なほどのネットにボールが通る音。

「ここは？」

海路が嘩然とコートを見ながら言う。ぼぶかるはドヤ顔で、

「車椅子バスケットボールです。略してイスバス。細かいところ意外は基本的なルールはバスケットボールと同じです。一番違うのがその名前の通りに車椅子に乗ってバスケットボールをします」

「あ、ぼぶかるさん」

やってきたのは車椅子に乗った黒髪ポニーテールの少女。だが、ぼぶかるは見覚えがない。

「えっと？」

すると少女は何かに気づいた様子で髪を下げて、

「この前はお世話になりました。一週間前に道案内して頂いて」

その姿を見たぼぶかるは先日長久手で出会った少女だと思いついた。

「あ、あの時の。髪をあげてたから思い出せなかった。えっと？」

「千恵(チエ)です。数字の千に恵みと書いて千恵って言います」

「へえー、千恵ちゃんって言うんだ。何、このチームなの？」

「はい、シニアですけど。ここは施設も整ってるし、病院の先生の紹介で。あ、私は石川県から引越して来たんですが……」

ぼぶかるは千恵が話で盛り上がりつつると海路は自分がのけ者にされた様子でも不満そうだった。それはぼぶかるに密かな恋心を芽生えかけていた海路が自分をお座なりにされていると言うぼぶかるへの子供の不満だった。そんな中でぼぶかるは海路の方向に振り向き、

「あ、この子は海路君。ここでバスケットをさせようと思うんだけど」

すると海路はむっすりと不満を込めた顔で、

「いいよ、車椅子でバスケットなんてダサいし」

すると千恵はその言動が逆鱗に触れた様子で火蓋を切った様に、

「何？ その態度。どうせ、交通事故にあつて自分は世界一不幸だとか思ってるんですよ。そんな程度の人にイスバスなんて無理よ」

交通事故の下りで怒髪天に当たった海路。体育館に響きわたるほどの大声で、

「別に良いよ！！好きで来た訳じゃないし、帰るよ、消えるよ！！」

そう言い放って海路はそこを後にした。

その言い合いに完全に置いてけぼりになったぽぶかる。気もそぞろに千恵の方向を見ると千恵は、

「ぽぶかるさん、あんな弱い子連れて来られても迷惑ですから。私たちは真剣にしてるんです」

ぽぶかるは千恵の言動にあたふた。

「ぽぶかるさん、こちらへ」

施設の奥の方でコーチらしき成人の男性がぽぶかるに声をかける。そしてしばらくぽぶかるはその男性と話した。

夕暮れ。海路の心境と同様にピリツとした冷たい空気が流れて居た。すると駅への帰り道に坂道で再び困って居ると、

「よっと」

海路が後ろを見るとやっぱぽぶかるだった。「何？」

海路が何か壁を作った様な言いぐさで返すとぽぶかるは、

「ちよっとだけお話良いかな？」

家までの帰り道。長久手の喫茶店で、

「実はね、千恵ちゃんの話なんだけど……」

海路はカフェオレを飲みながら怪訝そうな顔で返すが、

「ちゃんと聞いて。ちよっと長いけど」

ぽぶかるは一呼吸して海路の目を見て話し出した。

「これはイバスのコーチさんから聞いた話なんだけど。千恵ちゃんはね、生まれた頃から腰から下の半身が動かないんだって。

物心着いた頃から車椅子でそれが原因でいじめもあったりして、

一番傷ついたのは三年前に子供を産めない体だって聞かされた事でその時は本当に落ち込んだんだって、

そんな時にお医者さんから車椅子バスケットを勧められて、

千恵ちゃん初めて自分が運動出来るって知ってそれで一生懸命練習して、

千恵ちゃん。きつとそのバスケットを悪く言われてとても傷ついたんだよ。海路君もサッカーを悪く言われたら嫌だよね」

海路はその話に戻す言葉も無く千恵の心を自分と重ね合わせて考えてる様子だった。ぽぶかるは最後に、

「いつでも良いからまた車椅子バスケットに興味でたら連絡してね」

そしてぽぶかるは海路を途中まで送り帰った。

「で、今は連絡待ち？」

スマートフォンと睨めっこしたぼぶかるを横目にエネミイはいつも通り持ってきたパンを食べながら呟いた。

するとスマートフォンが鳴り即座にぼぶかるは反応する。

「うん、うん。よかったー。じゃあ、明日ね」

一息着くぼぶかるにエネミイは、

「どうだったの？ 海路君、バスケットやるって？」

ぼぶかるは嬉しそうに、

「うん、明日から見学だけでもしに行くって」

「よかったわね。で、千恵ちゃんの方は大丈夫なの？」

ぼぶかるはそのまま仮面を付けた様な笑顔で、

「……、え？ だ、大丈夫よ」

エネミイはおでこに手を当て、

「ノープランなのね」

当日。海路とぼぶかるはリハビリステーションセンターに居た。

相変わらず車椅子同士がぶつかると激しい音がしていた。その中に千恵の姿があり大きな声でバスケットをしていた。

男子達に混じって激しくプレーする千恵。それを見て海路は少しだけ彼女が美しく見えた。

それは中学生そこそこの少年が恋に落ちるのに相当な凛々しさ。そんな視線を感じたのか千恵は海路とぼぶかるの方向を向き手を振った。それを見て海路は胸をなで下ろす。

休憩時間。ぼぶかると海路は千恵の方へ向かった。まずはぼぶかるが元気に声をかける。

「こんにちは。また来ちゃった」

すると千恵も元気に返す。

「良いですよ。それよりこの前はすみませんでした。つい頭に来ちゃって」

ぼぶかるはそこに恐る恐る。

「ねえ、前のことまだ怒ってる？」

千恵は一度もじもじする海路を見てそこから再びぼぶかるを視線を戻すと、

「いはいえ、時薬（ときぐすり）です。時間がたったら収まりました。それより海路君の方はどうなのかな？ まだ嫌いだと思ってる？」

すると千恵の視線に入った海路は首を横に激しく振り否定した。千恵は少し口を緩ませて、

「ふふふ、良かった。嫌いでも仕方ないしね」

その笑顔に海路は少し照れた様子で頭を掻いた。千恵は自信に満ちた様子で、「じゃ、そろそろ休憩終わるから。よかったら練習終わったら話をしましょう」

そして千恵はコートに戻っていった。

海路は改めて練習を見る。けたたましい音、大きなかけ声。それは健常者サッカーとは似ていてそれより激しい競技だと海路は思えた。

そして練習が終了しぼぶかると海路は院内に有る喫茶店へと行った。

「お待たせ」

少し遅れて千恵が来る。千恵が注文を終えると千恵から切り出す。

「で、練習はどうでした？」

「ここはあえてぼぶかるは返さない。ここで緊張している海路の素直な感想を聞きだそうと言うこんなんだ。」

しばらく沈黙が入り海路がぼぶかると千恵の視線を察知した様子で海路から話出す。

「凄かった。想像以上に……。車椅子のパイプが当たって、みんな足が無かったり動かなかつたりするのに一生懸命でなんて言うか、感動した」

それを聞いた千恵は満足そうな顔をして、

「良かった。前みたいにダサいって言ったら殴ってやろうかって思ってたんだ」

すると海路は激しく首を横に振る。

それを見て笑うぼぶかると千恵。

照れた様子の海路は一呼吸して聞いてみた。

「千恵、さんはどうして名古屋に来たんですか？」

すると千恵は店員が持ってきたミックスジュースを少し飲むと、

「千恵で良いよ。前にも言ったけど施設が良いの。後はここがワールド bcc の本拠地だからかな？」

「ワールド bcc:」

海路の頭の中にハテナマークが出る。

「あ、ここね。イスバスじゃ、日本4連覇した強豪チームなの。女子だと関西のカクテルって言うチームも有るんだけどより上を目指すなら今の内に男の人と一緒にして強くなるうと思っ
てね。あ、イスバスってのは車椅子バスケットの略で……」

千恵の思った以上の饒舌ぶりにびっくりする海路だったがそれだけこの競技が好きなんだなと思えてきてそしてその情熱と千恵への下心も働いて自分もやってみたいと思っ居た。

話している内に同じスポーツマンの感覚かそれを感じ取った千恵は唐突に、

「それならどう？ やってみる？ イスバス」

「よろしく願います」

海路は反射的に頭を下げて車椅子バスケットをする事になった。

バスケットを初めて二週間。元々の運動神経も有り海路はメキメキ実力を付けた。そしてある日の練習日。

「お疲れ様でした！！」

一斉に大きな声が響く。

「海路君、ちよつと」

練習終わりにコーチに呼び止められる海路。

「なんでしょう？」

コーチは腰を落とし海路と同じ目線に立つと少しにやけた顔で、

「なあ、海路君。来月なんだが試合に出てみないかね？」

目を点にする海路。

「え？ 来月って二週間後じゃないですか！？」

「そうなんだよ。実はね、控えの子が一人試合に出れなくてさ。良い機会だ。出れるか分からない控えだし出てみないか？」

動揺する海路に千恵がそれを盗み聞いてたのか千恵は首を大きく縦に降ると海路も大きく縦に振った。

帰り道のリニア。住んでいる所が一緒なので海路は千恵とよく一緒に帰る。海路はまだ緊張気味だが千恵はそれほどでは無くフレンドリーな感じだ。

そして楽しく二人で会話していると海路は学生服の少年三人を見て着ていたフードを深くかぶった。

「どうしたの？」

千恵は当然の様子で疑問に思った。

海路は声を小さく、

「あいつら前のサッカー部の部員なんだよ。ここ一週間は顔出してないしここで千恵と一緒に居た所見られたら何言われるか」

千恵もその事情を理解した様子でそれを見守った。

「にしても海路。最近見ないよな」

少年の一人が切り出す。

「何？ あいつもうサッカー出来ないの？」

「出来んだろ。あんなんじや。もう戻って来た所で使えん、使えん。はい、試合終了です」

三人の笑い声に拳を強く握る海路そして怒りに任せて突撃しようとするが千恵がその手を暖かく優しく握った。

「言わせておけば良い。こんなものは時薬だよ。時間がたてばみんな忘れるよ。海路君もね」
その優しい言葉に顔を赤らめて照れた様子の海路。海路は千恵に手を握られたのは初めてだった。

試合当日。準備万端で気合いを入れる海路の前に彼には見慣れた少年たちが現れた。

「何しに来た？」

海路は不満そうな感じだ。

「何って応援だよ。同じサッカー部の部員だろ」

海路が不満に思うのも無理はない。その少年たちの中には前に海路を馬鹿にした奴らも混ざっていたからだ。海路はきつと笑いの種に見に来たに違いないと不服そうな顔。

するとその三人の少年が海路の前に出て、

「ごめん！！」

と頭を下げた。

何が起きたのか分からない海路とその他の部員。そして三人の一人が、

「ぼぶかるって人から聞いたんだ。海路、あれからがんばってたんだな。俺たち知らなかった。だから海路の居ないところで結構、小馬鹿にしてて。だからごめん。兎に角謝りたいんだ」

部員たちの後ろを見るとぼぶかるが手を振っていた。大きなため息をする海路。そして、

「いいよ、いいよ。許すよ。どうせ見てない所でやってた事だし。時薬だ。水に流すよ」

少年たちは海路に感謝をして他の部員たちもそれぞれ励ましの言葉を言って帰って行った。

そして残ったのはぼぶかるに海路は、

「ありがとう。ここまでしてくれるなんて」

ぼぶかるはドヤ顔で、

「千恵ちゃんから聞きました。このままギスギスしたのは海路君も嫌でしょ。せっかくなら皆に応援して貰った方が良いですし」

海路は照れ笑いを浮かべぼぶかるに、

「何でそんなに俺の事を助けてくれるんですか？」

と確かに当然な疑問を渡した。

するとぼぶかるは笑顔で、

「それは私が愛知の文化の妖精だからです。私は困っている愛知県の人たちを幸せにしてあげたいのです」

その答えになってない答えに対して海路はぼぶかるの底のない聖者の様な愛に触れた気がして幸せな気分になった。

「じゃ、行ってくるよ」

「うん」

海路はぼぶかるに見送られながら試合に向いた。

展開は想像以上に早く退場者、選手交代が続出。そして海路の出番も遅くは無かった。けたたましいホイッスルの音が会場に響く。

「選手交代三二番」

それは海路の番号だった。顔を叩く海路。それはサッカー時代の頃にやっていた気合いを入れる儀式だった。

ラインを越える海路。そして試合再開のホイッスルが鳴る。

ボールが選手たちの手に回る。そして海路の方にもパスが来る。

周りを見渡す海路。だがその目線の先から激しいそれは本番の試合ならではのタックルが海路を襲った。そして倒れる車椅子。すると海路はフラッシュバックが起きた。それは紛れもない交通事故があった時の事。その凄まじいタックルはそれを彷彿とさせるものだった。

目に見えて動揺しそのまま起きあがれない海路。それを見たコーチは選手交代を命じる。

気が付けば海路はコートの外。すると激しい恐怖感が海路を襲い。会場の外へと逃げ出した。

「おい、海路が出て来たと思ったら退場しちまったぞ」

「やっぱりあいつは終わってんな」

さっきの少年たちを知り目にぼぶかるも外へ出た。

息を乱す海路。するとそこへハーフタイムで心配して見に来た千恵。

「大丈夫？」

千恵が声をかける。だが海路は無言で首を横に振る。だが、千恵はそこで勇気を出す。何故ならここで優しく辞めさせてしまったら今後海路は車椅子バスケットを出来なくなってしまうと確信したからだ。

「大丈夫、慣れたら大丈夫だよ。こんな事イスマスやってたら日常茶判事だって」

「こんな事がいつもだったら怖くて出来ないよ」

今までとは比べものにならないほどの声を高めた海路の言葉はそれほど前の記憶が恐怖だった事を彷彿とさせていた。その声に返す言葉もない千恵。だが、千恵は再び勇気を振り絞って。

「な、何か出来ることない？ 私の出来る事があれば私やるよ？」

すると冷静な判断力をなくした海路は秘めた思いをここぞとばかりに、

「じゃあ、付き合ってくれるか？ もしも試合に出たら付き合ってくれるか？」

するとしばらくの沈黙。そして千恵は低いトーンで、

「ごめん。そう言うのは違う気がする……」

正論に黙り込む海路。すると心配して見に来たぼぶかるが千恵の後ろに見えた。

その姿に海路は何か気づいた・

自分はぼぶかるに支えられて来たから一人じゃない事、そしてここに連れて来て貰ってま

だスポーツが出来る事。そしてまだ自分には未来が有る事。

何かの今まで溜まっていた物が吹き出てスッキリしたかの様に海路は自分の顔を思いつきり叩いて、

「だよな」

その顔はスッキリとして何もかも気楽になった様子だった。そして海路は続けて、

「ありがとな。イスバスに誘ってくれて。俺、ここで努力とか恋愛とか勝利とか久しぶりに体感出来た気がする。こんなのもう出来ないと思っていたのに。ありがとう。だからがんばるよ。そしてまた告白して良いか？」

千恵はその言葉に安心した様子でうなずいた。

「はあ、外は辛いわ」

車椅子バスケットの観客席でエネミイが呟く。

「ただいま」

後ろからぼぶかるがエネミイに呼びかける。

「で、どうだったの？ あの二人の恋の行方は？」

エネミイはニヤリとした顔で聞く。

「どうにもなりませんでしたよ」

ぼぶかるはそう言ってストンと席に座る。

「まったく、これであなたの人助けを手伝うの何百回目かしらね」

エネミイはバケットに入れたメロンパンを頬張りながら言うと、

「良いじゃないですか。愛知の人々を幸せにするのも愛知の文化の妖精である私たちの仕事ですよ」

ぼぶかるは本当に幸せそうに戻って来た海路と千恵の試合を見る。エネミイが持ってきた小倉トーストを食べながら。

終